

『想い人』

まか

彼方は、今でも私のことを覚えていてくれるのでしょうか。

周りに「やめておけ」と言われましたが、この年になつても忘れられないのです。

だから、

——逢いにゆきます。

六月の冷たい雨が降る日、彼女は東京駅に着いた。乗っていた夜行バスは狭く、眠るには窮屈で、寝返ろうにも寝返ることができなかつた。そのためにバスから降りる頃には腰痛に悩まされることとなつた。ただ、そんな痛みも気にならないくらいに、この大都会東京に胸をうたれていた。何十年も夢見ていた都会。彼が昔列車に乗って去って行った東京。地図で見ると小さな東京だけれど、実際にそこへ立つてみると途方もなく広く、本当に彼を見つけることができると小きるのか心配になつてきた。

駅に着くと、「無事着いた」と家族に連絡するため電話をかけようとしたが、公衆電話が見当たらない。少し歩いて探すと、ぼつんと居心地悪そうに肩を縮めたそれを発見した。ほんの

十年から二十年前までは公衆電話といえどこへ行つても見ることができたのに、今となっては探さないと見つからないほどに減つてしまった。それを悲しく思うのだが、時代の流れといふのは残酷なもので、新しいほうへ新しいほうへまるで川のように流れていく。遡ることはできてもそれは「今」の流れで、「過去」の流れに戻ることはできない。過去に戻りたい半面、今の豊かさから抜け出すことができなくなつてしまったのも事実。

財布から十円を数枚取り出し家の番号を押す。数回の呼び出し音で相手のいかにも寝起きのような疲れている声が出た。「東京に着いた」と手短かに連絡を入れると受話器を下ろす。すると、余分に入れていた十円玉が音を立てて落ちてきた。まるで彼の去つた後の彼女の心のようにカランと。一回深呼吸をすると、東京の流れに入つていくことを決心した。

都会ということもあり、人の流れはとどまることを知らない。どこかで電車が止まるたびにたくさんの人が押し寄せてくる。流されまいと反対方向へ向かおうとするが、すぐ流されてしまえば早くも迷子になつてしまった。路線図を見ようにも色とりどりの線が描かれているだけでどう行けばいいのか分らない。駅員に尋ねてみるが、早口で聞き取ることができなかった。仕方なく、駅を出て辺りを見回していると、高層ビルばかりでここはオフィス街であることを悟る。淀んだ空にそびえる東京のビルは大きいものばかりで、上方を見上げていると、それだけでめまいを起こしてしまふそうだ。

彼はこんなところに住んでいるのだろうか。

こちらに着いてからずつとそんなことばかりを考えている。

駅のほうへ戻りもう一度路線図を見てみる。手紙ではよく書いていた住所であつたが、実際に行くともとても遠い。

時計は十時を指し、人の流れは大分和らいできたようである。それでも喧騒は絶えず、常に人々はどこかへ向かつていく。東京駅がまるで一つの街のように人が往来して、観察するのは楽しい。

彼女を横切り改札を通る人は切符も買わずに素通りしている。それを見て彼女は、都会のほうでは金がなくても電車に乗れるのだと勘違いしてしまう。電車の中で車掌に金を払って買うのだろうか。彼女の住んでいる田舎では、切符は車掌に言つて買うことがあるようで、こちらでもそうなのだと思つている。実際、彼女も行こうとしたのだが、なぜかピンポンと警告音が鳴り改札口が閉まつてしまった。

そういえば田舎に改札などはなかった。

どういふことなのかと彼女は困惑している。駅員に止められて説明を聞くと、改札は「カードか切符がないと通れない」と説明を受けた。確かに辺りをよく見回してみると切符を買わない人はみなカードタッチをして通つている。それに、改札口から少し離れたところに券売機が壁に沿つて並んでいた。彼女は顔から火が出る思いで券売機に金を入れて切符を買う。もう、穴があつたら入りたくらいに……

元と私鉄、行き先によって乗る電車が違う。

彼はこんな複雑な迷路をいつも通つてどこかへ出かけているのだろうか。

彼女は何年かかっても覚えられそうにないと頭を横に振る。手元にはバスを予約したときに調べてもらった行き先までのメモ用紙を握りしめ電車のホームへ向かう。

元山手線は予想していたより人が少なく、空いていた席に座ることができた。切符を見て目的の駅を頭に入れる。

「次は上野駅、上野駅」

アナウンスの音声が流れるとすぐに立ち上がって、開く扉のほうへ向かう。東京の電車にはテレビがついていて、よく見ると天気予報や英会話、豆知識、ニュースも流れている。

都会は面白い。

田舎に回つてくるのはいつも使い古されたものばかりであるが、都会になるとそれは新品のものばかり。

ピカピカに磨かれた街。

それが彼女のイメージだ。

上野駅に着く。そのころにはすっかり昼模様となり、ここに来るまで使っていなかった傘をようやく開く。雨はやむことがなく、天からしずくを滴らせる。雨は好きだ、と彼女は言う。

土地を浄化してくれるし、心を落ち着かすことができる。

それに、雨の降る日の風景は色彩が色濃くなるようで、見ているのが面白い。

「そういえば」、彼女は思い出す。今まで全く気にすることなくここまでやってきたのだが、気が緩んだようだ。ぐう。腹が鳴った。腹ごしらえをしようとして近くにある喫茶店へ向かった。店内は落ち着いた雰囲気があり、ジャズの音色が会話の邪魔にならない程度に流れている。飴色に磨かれた床は雨の日だというのに滑ることはない。店員に案内されたのは窓際の席で、外は相変わらずの雨模様である。渡されたメニューを見て手頃なサンドイッチと紅茶を頼む。トマトとチーズ、レタスとハムのサンドイッチで程よくボリュームがあった。それを一口咀嚼するとトマトのすっぱい酸味が口いっぱいに広がる。ミルクテイで流しつつ外を眺めた。今日は休日だ。近くの学校で授業が終わったようで、高校生らしい学生が楽しげに駅に向かっている。昔のことを思いだした。駅前で家族や友人に囲まれて別れのあいさつをする彼。それが今の学生たちと被り無性に懐かしく感じた。

もし、あのころに心の内を伝えることができていたら……

ふとそんなことを考えていると、

彼がいた。

驚いて何度も瞬きをする。

彼だ。

学生服を身に付けた彼はりりしく映る。思わず立ちあがり、伝票を持って清算して外へ出た。

外へ出て彼を追いかけようとするとテレビカメラを持っている人が駅前にかくさんいた。何かの特集をしているらしく道行く人々を撮っている。彼女はそれに構わず彼を追いかけて駅まで行く。だが、彼の姿はななくどこに行ったかも分らない。追うのはあきらめて彼女は『上野公園』と書かれた看板を頼りに公園に行くことを決めた。